

ラルゴ

CMはクラシックがお好き

Ombra mai fù 手塚幸紀：指揮／大阪フィルハーモニー交響楽団

Side 1

1. "ラルゴ" (ヘンデル曲) w 井岡潤子 (ソプラノ) 2'57"
2. "ラブソニー・イン・ブルー" より (ガーシュウィン曲) w 小原久幸 (ピアノ) 5'31"
3. 交響曲第8番ハ短調：第4楽章より (ブルックナー曲) 5'33"
4. "ピーターと狼" より "ピーターのテーマ" (プロコフィエフ曲、作品67) 0'48"

Side 2

1. "カルメン" 前奏曲より (ビゼー曲) 2'14"
2. "くろみ割り人形" より "花のワルツ" (チャイコフスキー曲、作品71a) 6'41"
3. "メリー・ウイドウ" より "ワルツ" (レハール曲) 2'24"
4. "大地の歌" より 第3楽章 "青春について" (マラー曲) w 岩城拓也 (テノール) 3'06"

Side 3

1. "ボレロ" より (ラヴェル曲) 5'33"
2. "天国と地獄" 序曲より (オッフェンバック曲) 2'09"
3. 交響詩 "モルダウ" より (スメタナ曲) 2'03"
4. "美しく青きドナウ" より (J. シュトラウス2世曲、作品314) 2'15"

Side 4

1. 交響曲第5番ハ短調より 第1楽章 (ベートーヴェン曲、作品67) 5'59"
2. 交響曲第1番ハ長調より 第1楽章 (ベートーヴェン曲、作品21) 7'42"

全曲盤参考レコード

- Side 1. ①なし ②ブレヴィン指揮及びピアノ／ロンドン響～CC33-3291(CD) ③シュリーヒト指揮／ウィーン・フィル～EAC-55043・4(LP) ④ブレヴィン指揮／ロンドン響～EAC-55029(LP)
- Side 2. ①小沢征爾指揮／フランス国立管～EAC-90213(LP) ②ランチェリー指揮／フィルハーモニア管～CC33-3342(CD) ③ブレヴィン指揮／ロイヤル・フィル～CC33-3620・1(CD) ④マタチッチ指揮／フィルハーモニア管及び合唱団～CC30-3326・7(CD) ⑤クレンペラー指揮／フィルハーモニア管～CC33-3265(CD)
- Side 3. ①クリュイタンス指揮／パリ音楽院管～CC33-3396(CD) ②カラヤン指揮／フィルハーモニア管～EAC-55049(LP) ③カラヤン指揮／ベルリン・フィル～EAC-81002(LP) ④ボスコフスキー指揮／ウィーン・ヨハン・シュトラウス管～CC38-3029(CD)
- Side 4. ①フルトヴェングラー指揮／ウィーン・フィル～CC35-3162(CD)～EAC-50061(LP) ②クリュイタンス指揮／ベルリン・フィル～CC25-3742～7～EAC-55103(LP)



大阪フィルハーモニー交響楽団

General Music Director: 朝比奈 隆

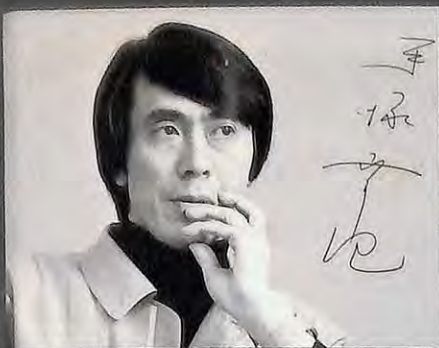
Principal Conductor: 秋山和慶

Conductor: 大友直人

Concertmasters: 岡田英治、稲庭 達

インストラクター: 山崎 隆・唐川集三・楽譜: 村山久彦・ステージ: 今尾政和・加藤安男・大阪フィルハーモニー交響楽団 運営委員会・委員長: 本郷 公・委員: 橋本 幸・顧問: 古畑敏之助・高谷昭夫・事務局長: 宮澤敏夫・事務局: 小林義明・玉井和志・柳田泰典・(社)大阪フィルハーモニー協会 理事長: 伊部恭之助・専務理事: 渡多野一雄・常任理事:

1st Violins	長谷川 桂一	服部 滋夫	神田 恵	中西 泰	井上 和子	杉本 眞孝	廣川 為一	井手 三三	吉井 昌	廣水 美穂	堀田 重	安藤 信行	山崎 隆	稲庭 達	柳田 泰典	Uchida
岡田 英治	長尾 正	山本 彰	伊藤 勇江	2nd Violins	外池 秀義	横本 安弘	村上 長次	明津 進	西内 晏	田中万四枝	和田 宏教	堀田 信則	山崎 隆	稲庭 達	柳田 泰典	Uchida
稲庭 達	田淵 芳郎	外池 香代	関口美奈子	岩本敬一郎	奥井富貴子	阿部 修也	三原 登彦	小林 夢	前川 澄夫	阪田 務	安斎 新秋	山崎 隆	石井 博和	三好 信郎	高橋 成典	Piccolo
藤井 允人	弓山 アヤ	中谷 幸子	安田 千尋	塩田 良正	近藤 緑	松浦 敦志	Violas	榎本 昭生	多治見和子	Cellos	堀 恭二郎	大和 重典	南村 利	布川 敬介	高橋 成典	城石 賢明



【指揮者】手塚幸紀

1940年東京に生れる。1958年東京芸大器楽科にフルートで入学。1960年より一年間、高藤秀雄氏のあとで指揮法を学び、62年より学内で指揮活動を行う。64年に東京芸大指揮科に再入学。渡辺晩雄、山田一雄両氏に師事する。

1967年民音指揮コンクールで第1位を受賞し、注目を集める。翌68年、芸大卒業と同時にヨーロッパ各地を回り、8月から12月までベルリンに学び、この間にRIAS放送のためベルリン・ラジオ・シンフォニーを指揮する。1969年に帰国し、1970年2月に日本フィル指揮者に就任、日本フィル定期をはじめ、京響、東フィルの定期演奏会、テレビ、ラジオに出演し活動を広げる。1971年11月より文化庁派遣海外研修員としてヨーロッパ・アメリカで研修を積み、1972年8月に帰国、同年10月より1983年8月まで日本フィル指揮者をつとめる。また、新日本フィルにも指揮に加わる。

1983年4月から1985年3月まで京都市交響楽団指揮者を務める。現在は名古屋フィル首席客演指揮者の他、日本の主要オーケストラを数多く指揮しており、常に安定した高い評価を得ている。



【ソプラノ】井岡潤子

昭和34年3月5日生。昭和56年大阪音楽大学卒業、同大学院終了。関西歌劇団所属。

オペラでは、モーツァルト「後宮よりの逃走」のコンスタンツェ、ヴェルディ「ドン・カルロ」のエリザベッタ、レオンカヴァルロ「ハリアッチ」のネッタなどの主演を演じ、特に今春のネッタ役では、情熱的な歌唱と演技で大好評を博した。張りのある美声で、強い感性を呼ぶ大型ツバサとして将来を囑望されている。



【テノール】岩城拓也

昭和31年3月29日生。昭和56年大阪音楽大学卒業、同大学院終了。関西歌劇団所属。

オウラでは、モーツァルト「後宮よりの逃走」のベルモンテ役で好評を博し、引続きヴェルディ「ドン・カルロ」のドン・カルロを演じ、主役テノールとしての地歩を固めた。

大阪フィルとは「第九」等のソリストとして度々協演。



【ピアノ】小原久幸

昭和29年12月27日生。堀川高等学校音楽科ピアノ専攻卒。京都市立芸術大学音楽部ピアノ専攻卒。園田高弘、下村和子の各氏に師事。

1982年に大フィルと共にショパンのピアノ・コンチェルト第1番を弾き好評を博す。その他、近代のものを中心としたソロ活動及び室内楽など、主に関西において幅広く活躍している。

現在、大阪芸術大学非常勤講師。



制作にあたって

DAM会員の皆様、日頃のご愛顧、誠にありがとうございます。前回の第26回頒布会ならびに、今春のガラス原盤VIP45に対する会員の皆様の熱烈なご支持に、あらためて、スーパー・アナログでのDAMの使命を認識した次第です。

ところで、このところ、TV-CMで、クラシックの名曲が使われることが流行となっていることは、皆様も良くご存知のことと思います。この種のものとして、古くはラジオ時代から、文明堂の“天国と地獄”が有名でしたが、実は当社の“ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」、同、第1番”を使ったTV-CM「第5じゃない、そう第1……」もクラシックTV-CMのはりしとして、10数年前に話題となったことを、ご記憶の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そして最近になって、ホンダの“ボレロ”ニッカの“オンブラ・マイ・フ(ラルゴ)”、サントリーの“大地の歌”等で、一気に火がついたわけです。レコード各社から、それらのクラシックCM集が、カセット、LP、CDで次々と競って発売されましたが、特に、キャスリーン・バトルの“ラルゴ”を収めた45回転LPは、25万枚以上の売れ行きとかで、クラシックの国内レコードとしては、驚異的な人気となっています。

そしてこの5月～6月にかけてのキャストリー・バトルの来日で、その話題は頂点に達した感があります。

今回で48タイトルとなったDAM45（VIP45を含めると57タイトル）の中で、クラシックは半分以上を占める重要レパートリーですが、この機会に、普段クラシックをお聴きにならない方にも、気軽にクラシックの名曲を楽しんでいただこうと、この「ラルゴ●CMはクラシックがお好き」2枚組アルバムを制作いたしました。

同じやるなら、DAMらしく他に無いものを
ということで、手塚幸紀氏と大阪フィルハー
モニー交響楽団(以下“大フィル”と略します。)と
及び東芝EMI(株)の絶大なご協力を得て、フル
オーケストラにより、クラシック CM集を、
DAMオリジナル録音いたしました。

朝比奈隆氏（音楽監督）のもと、大フィルは、ブルックナー、ベートーヴェン、マーラーの演奏で特に高い評価を受けていて、そのレコードも多く、日本を代表するオーケストラの一つです。今回は、TV-CM集ならではのヘンデルから、ガーシュウィンまで、大変巾の広いレパートリーを、手塚幸紀氏に指揮していただきました。手塚氏は、ヨーロッパ、アメリカで活動された後、大フィル、京都市交響楽団を経て、現在は、新日本フィルハーモニー、名古屋フィルハーモニー、群馬交響楽団の指揮者として活躍されています。

更に「ラルゴ」、「大地の歌」、「ラプソディー・イン・ブルー」のソリストとして、井岡潤子さん、岩城拓也氏、小原久幸氏という、関西音楽界のホープを起用しましたが、その清新な演奏をお楽しみいただけることと思います。

録音は、近畿大学のご好意で、完成したばかりの木の内装のホールを使用して、'87・3月18～19日の両日に渡って行われました。

それぞれの収録時間は短いというものの、ブルックナーやボレロのような大編成の曲もあり、ソプラノ、テノール、ピアノと3曲のソロもある、全14曲のレコーディングは演奏者にとっても、スタッフにとっても大変にハードなものでした。しかし、手塚幸紀氏の、瞬かく誠実なお人柄と、てきぱきとした

棒さばきのもと、大フィルならではのダイナミックな演奏を収録することが出来ました。中でも、ベートーヴェン、とりわけ交響曲第1番は、牛気あふれた素晴らしい演奏です。

DAMの録音ポリシにより、このアルバムは、 $\frac{1}{2}$ インチ巾76cm/secアナログ2チャンネル録音が採用されています。(同時発表のCD「DOCD-0009」にはデジタル録音を採用いたしました。)アナログ録音の優秀性と、完成度の高さは、DAMとして再三、申し上げている通ですが、このところCDの急増により、市販のアナログ・レコードの発売点数が減り、それに伴い、アナログ・レコードの製造技術の進歩が止ってしまったかのように見えるのは大変残念なことです。そこで、今春、DAMが東芝EMI株の最新製造技術を盛り込んだ、世界初のガラス原盤・200g・スーパー・アナログ・ディスク・VIP45(DOR-0147)を発表したところ、予想をはるかに越えるご予約をいただきました。その折、ご予約に応じ切れなかったお詫びを兼ねて、本アルバムの製造にあたっては、ガラス原盤・200g・ディスクを製造した時の最新メッキ技術、プレス技術等、新たに数々のノウハウを取り入れ、より完成度の高いスーパー・アナログ・ディスクを、目ざし努力しています。(ただし製造枚数制限やコストの問題から「ガラス原盤」そのものと、「200g」は採用しておりません。)カッティングにあたっては、送り出しデッキとして、アンベックスとステューダーを聴き比べ、今回は情報量の多さと、特性の良さ等から、ステューダーを採用。録音当日の $\frac{1}{2}$ インチ・76cm/secマザー・テープを録により若干の編集作業をしただけで、ダビングや音の加工は一切せず、ノン・リミッター、ノン・イコライザーでハイレベル・ストレート・カッティングをしています。

オーディオ的にも、弦だけの小編成から、標準的な編成、そして約90名の大編成まで、オーケストラの規模も変化し、更に多彩なソロが加わり、全曲いたるところに、チェック・ポイントがあるといっても過言ではありません。特に、雄大なスケールの大太鼓など、全体に重厚な低域を基調としたサウンドが特長です。又、ダイナミック・レンジが極めて広く、カートリッジによっては、一部の曲でトレスが難かしい場合もありますが、ご了承ください。

なお、今回はなるべく多くの曲を収録するため、殆どどの曲は、TV-CMに使われている部分を中心に数分間の抜粋となっていましたので、参考までに、それぞれの代表的な全曲盤を、別項に紹介いたしました。

又、6月より、この手塚幸紀～大フィルによる、当社NEW・TV-CM（ステレオ音声）が放映される予定ですので、ご覧いただければ幸いです。

今回のアルバム作成にあたり、手塚幸紀氏、大阪フィルハーモニー交響楽団、ソリストの皆さん、近畿大学、TV-CM写真を提供していただいたメーカー各位、東芝EMI(株)及びスタッフの皆さん、沢田敏氏に多大なご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

最後に、来年の当社創立30周年にむけて、更にビッグな記念レコーディングを計画しておりますので、ご期待ください。今後とも皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会 **DAMPC**

ラルゴ

Ombra mai fù

CMはクラシックがお好き

手塚幸紀指揮／大阪フィルハーモニー交響楽団

〈ソプラノ〉井岡潤子〈テノール〉岩城拓也〈ピアノ〉小原久幸



Side 1

1. “ラルゴ”(ヘンデル曲) w/井岡潤子(ソプラノ)2'57"
2. “ラブソディー・イン・ブルー”より(ガーシュウィン曲) w/小原久幸(ピアノ)5'31"
3. 交響曲第8番ハ短調：第4楽章より(ブルックナー曲)5'33"
4. 「ピーターと狼」より“ピーターのテーマ”(プロコフィエフ曲、作品67)48"

Side 2

1. “カルメン”前奏曲より(ビゼー曲)2'14"
2. 「くるみ割り人形」より“花のワルツ”(チャイコフスキー曲、作品71a)6'41"
3. 「メリー・ウイドウ」より“ワルツ”(レハール曲)2'24"
4. 「大地の歌」より第3楽章“青春について”(マーラー曲) w/岩城拓也(テノール)3'06"

Side 3

1. “ボレロ”より(ラヴェル曲)5'33"
2. “天国と地獄”序曲より(オッフェンバック曲)2'09"
3. 交響詩“モルダウ”より(スメタナ曲)2'03"
4. “美しく青きドナウ”より(J.シュトラウス2世曲、作品314)2'15"

Side 4

1. 交響曲第5番ハ短調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品67)5'59"
2. 交響曲第1番ハ長調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品21)7'42"

STEREO DOR-0149・50

DAMPC

CMはクラシック音楽のショーウインドウ

テレビCFとクラシック●堀内 修

乏しい石油を四苦八苦して使っていたのだが、ふと自分たちが大油田の上に住んでいるのに気がついた。というわけでもないのだろうが、大油田に眠っていた良質の石油、つまりクラシック音楽が、奔流のようにテレビから流れ出た。自動車はレハールのワルツで踊り、ウィスキーはマーラーで杯を満たす。

現役の、オフエンバック「天国と地獄」（あの「カステラ1番、電話は2番」です）を別にしても、これまでクラシックがテレビCMに使われた例は、皆無ではなかつ

た。ヨーロッパやアメリカでも、珍しいというほどではない。ただし、その使われ方は違う。今までは、人々の持つクラシック音楽のイメージに添ったところで使われてきた。商品は、たとえば香水とか宝石。それがよく吟味された美しい映像で出てくる。音楽はモーツァルトにショパンにラフマニノフという具合だ。

香水にラフマニノフを合わせたCFのディレクターが、極東の中世の武士たちがヴェルディのオペラ「椿姫」の「乾杯の歌」を歌いながら缶チューハイをぐいぐい飲んでいるのを見たら、びっくりして目を回すのではないか。

確かに、改めて見直してみると、クラシックは音楽の宝庫だ。ヨーロッパの繁栄を背景にして、長年にわたって蓄積し、淘汰してきたクラシックは、ただメロディーという面を取り出すだけだって、相当なもの。その気になって捜せば、適切な音楽はいくらでも見つかる。

けれども、なんとなくわれわれが常識のように思ってきたクラシックのイメージ、上品だとか、長さが大切とか、保守的だとかいったイメージを崩し始めたところに、いまのブームがあるのではないだろうか。これは想像なのだが、ヒットするクラシック・テレビCMは、クラシックに通じている人ではない人によって生み出されているのではないだろうか。ベートーヴェンの音楽は偉大な芸術、なんていうところにこだわっていたら、とても今のCMは作れやしないはずだ。

たとえばあのキャスリーン・バトルがヘンデルの「ラルゴ」を歌ったウィスキーのCMだ。一見クラシックのこれまでのイメージに近いようだけれど、作ったのはまずクラシックの専門家、あるいはクラシックに通じている人ではない。バトルは良い歌手だし、盛り坂の、一部から注目されていた歌手だった。けれども、歌わせるのにことかいて「ラルゴ」とは、ちょっと考えつかない。オペラ



「セルセ」の中のアリアで、中学校の音楽の教科書に載っている、どちらかといえば芸のない歌だ。もしバトルをよく知っていたら、モーツァルトの気のきいたアリアかなんかを選んだろう。ところが実際には「ラルゴ」が大正解だったわけだ。

大体クラシックの曲は長い。ワーグナーの楽劇になると1本ざっと4時間半。「ニーベルングの指環」に至っては、4晩で合わせて15時間などという途方もない長さ。一方テレビCMは極端に短い。1分そこそこ。わずか15秒というのだから。一体これがどうして合体できるのか、と旧来の常識で考えてしまえば、クラシック・テレビCMのパワーを見損なってしまう。断片だろうが、マーラーはマーラーだし、ベートーヴェンはベートーヴェンで、そこらへんの作曲家の力作などより、選びようによってはずっとずっと人を動かす力を持っている。

クラシックは、もともと「芸術のための芸術」で、何かの効用を考えて作られたわけではないのだけれど、気持ちを高ぶらせたり、落ち着かせたりという効用ならある。断片であっても強い効用を持つのなら、それを商品宣伝に利用しない手はない、というのが、おそらくクラシック・テレビCMの原理みたいなものなのだろう。その原理は確かに正しくて、人はマーラーでウィスキーのグレードを認め、レハールで自動車の軽やかなイメージをとらえる。

宣伝の狙いは見事に成功したのだけれど、受けとる方だって、受身一方の立場に甘んじない。商品のために豊かな音楽の宝庫クラシックを利用するのなら、音楽の宝庫のためにCMを利用してしまおうとする。商品のショーウインドウであるテレビCMを、クラシック音楽のショーウインドウとして利用しようというわけだ。

その視点、つまりクラシックのショーウインドウとしてCMを見ると、実に役に立つのがわかる。常識に添った「名曲集」の枠を越えた広がりを持ち、しかもディスプレイは極限まで切りつめられている。ニューヨークなら五番街、パリならフォーブール・サントノレといった通りの、それ自体がすでに芸術であるような、ウインドウ・ディスプレイではないだろうか。

今のところ、まだクラシックという巨大な店から、ほんの一握りが取り出され、展示されているに過ぎないのだけれど、金のかかった飾りつけは、十分にその在庫のすばらしさをうかがわせる。思わず足をとめ、中に入ってみたくなくてもいいし、ショーウインドウの楽しさを味わいつつ通り過ぎてもいい。

曲目解説

●ラルゴ——ヘンデル曲

大ブームとなったスーパーニッサのCMで歌われているのがこれ。ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルのオペラ「セルセ」(または「クセルクセス」)の中で、セルセが歌うアリアだ。バッハと並ぶバロックの大作曲家ヘンデルは、オラトリオとオペラを得意としていた。何しろ時代が古いので、たくさんあるオペラも現代ではあまり上演されない。だがこの「セルセ」第1幕のアリアは、あまりにも有名になった。「この深く茂った木蔭ほど」と歌う歌だけれど、ゆっくりと、という意味の「ラルゴ」の名で知られ、さまざまな器楽曲に編曲されている。シンプルな美しい歌だが、ヘンデルの時代にはたくさん装飾をつけて歌われていたらしい。

●ラプソディー・イン・ブルー——ガーシュウィン曲

きっとニッサン・ブルーバードは都会派の自動車なのだろう。ニューヨークの1920年代が合うのかも知れない。ジョージ・ガーシュウィンが1920年代に発表した「ラプソディー・イン・ブルー」は、ジャズを取り入れた、というよりはジャズとクラシックの境界にあるような、ピアノと管弦楽のための曲。発表当時新鮮な衝撃を持っていたのだけれど、クラシックの仲間入りをしてしまった今も、その新鮮さはそのままだ。演奏は後半の一部。

●交響曲第8番——ブルックナー曲

三菱自動車のサイクロン・エンジンが空中にその姿を見せると、思わず「このエンジンはエネルギーがあって重厚だ」と思ってしまうのは、きっとブルックナーのせいだ。重々しいだけでなく、長大さでも有名なのがアントン・ブルックナーの交響曲だが、第8交響曲の第4楽章の、ごく一部だけで



●ニッサン：ブルーバード、「ラプソディー・イン・ブルー」より



●三菱自動車：サイクロン・エンジン、交響曲第8番ハ短調：第4楽章より



●マツダ：カペラ、「ピーターと狼」より「ピーターのテーマ」

も、そうした特徴が聴こえてくる。ブルックナーは第9番まで書いているが、これは未完なので、第8番のは最後の第4楽章ということになる。

●ピーターと狼——プロコフィエフ曲

森の中を陽気に走るマツダ・カペラのテーマはピーター。ロシアソビエトの作曲家セルゲイ・プロコフィエフが、子供たちのために書いた交響的物語「ピーターと狼」の、少年ピーターを表わす音楽だ。この曲は、各楽器の音の説明などが巧みに盛り込まれ、オーケストラ音楽入門にぴったりなので、音楽の教材として使われるから、知っている人が多いはず。親しみ易い曲だけれど、よく出来ていて、子供向けでないコンサートでも取り上げられる。ピーターのテーマは、簡潔に明るい少年ピーターを描いた音楽。

●「カルメン」前奏曲——ビゼー曲

キリン・オフサイドに「カルメン」前奏曲がぴったりとも思えないのだけれど、意外性で案外良いのだろうか。あまりにも元気で真面目な曲の、別の効用かも知れない。それに今は「カルメン」ブームの真っ只中だ。若くして亡くなったフランスの作曲家ビゼーだが、「カルメン」だけでその名は不滅になりそう。メリメの原作をオペラ化したこの作品は、初演のときは不評だったが、今はフランス・オペラの代表作。ジプシー女カルメンと、恋するあまりカルメンを殺してしまうホセの物語は、恋物語の一典型となった。躍動感あふれる前奏曲だけでも、オペラの熱気はわかる。

●花のワルツ——チャイコフスキー曲

名バレリーナならぬいすゞジェミニのレパトリーの一つ

が「花のワルツ」。(この曲は大和運輸の宅急便でも使われている。)パレエ音楽というとペーター・イーリッチ・チャイコフスキーの独壇場みたいところがあり、「白鳥の湖」「眠りの森の美女」等を作曲している。この曲は「くるみ割り人形」の中に入っている。ドイツのロマン主義の作家E・T・A・ホフマンの童話をもとにして作られたこのパレエは、クリスマスには欠かせない演目となっている。少女クララが夢を見ると、くるみ割り人形が王子となって、お菓子の国での冒険が始まる。「花のワルツ」は、このパレエのフィナーレ、お菓子の国の大舞踏会の場面で演奏される、華やかな曲だ。

●メリー・ウィドウよりワルツ——レハール曲

いすゞジェミニは、チャイコフスキー「花のワルツ」でも踊るが、この曲でも踊る。ウィーンの、ヨハン・シュトラウ



●いすゞ：ジェミニ、「くるみ割り人形」より「花のワルツ」



●いすゞ：ジェミニ、「メリー・ウィドウ」より「ワルツ」

スに続く「白銀の時代」に活躍したフランツ・レハールの代表作「メリー・ウィドウ」(陽気な未亡人)の中の有名なワルツだ。このオペレッタは、大金持ちの未亡人と昔の恋人との恋愛を軸にしている。その未亡人ハンナと恋人ダニロがわだかまりをとりて結ばれる場面に出てくる。「唇は黙っているがヴァイオリンの調べは」と歌われる二重唱は、ウィenna・オペレッタの粋とでも呼ぶべき曲。

●大地の歌——マーラー曲

マーラーは確かに「時代に合ってきた」ようで、今やブーム。尾形光琳の絵と合わせたサントリー・ローヤルのCMも、ブームの一部となった。「大地の歌」はグスタフ・マーラーの9番目の交響曲。だがマーラーは、ベートーヴェンが9番完成の後にシンフォニーを書けなくなったことに始まる「不吉な9番」のジンクスから逃れるため、あえて「大地の歌」とだけした。中国の詩のドイツ訳を使った6楽章の交響曲だ。CMで使われたのはその第3楽章「青春について」の一部。「小さな池の中に、緑と白の陶器のあずまやが立っている……」と歌い始め、中国のどこかで酒をくみ交わす様子が描かれる。

●ボレロ——ラヴェル曲

ホンダは音楽用語が好きらしい。アコードにプレリユード。プレリユードは前奏曲なのだけれど、ホンダ・プレリユードが登場するときに響くのは、スペインの舞曲の名をとった、モーリス・ラヴェルの「ボレロ」だ。有名ではあるけれどもかなり奇妙な曲で、一つの主題がえんえんとくり返される。変化するのは音色。たったひとつのクレッシェンドがつけられているが、ものすごく長いこのクレッシェンドが生きる。ある舞踏家の依頼で作られた。今でもパレエに使われることが



●文明堂：カステラ、「天国と地獄」序曲より



●サントリー：オールド、交響詩「モルダウ」より



●東京海上、「美しく青きドナウ」より

ある。

●天国と地獄——オッフェンバック曲

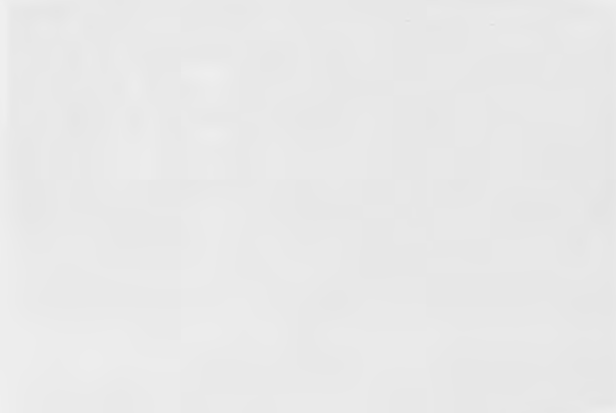
もはや古典とでも呼ぶべき、文明堂カステラのCM。オーストラリアの人形使いの名人によるぬいぐるみのカンカン踊りには、オッフェンバックの曲だ。昔「天国と地獄」と訳され、定着してしまったけれど、「地獄のオルフェウス」というのが、オッフェンバックのオペレッタの名前。オルフェウス神話のパロディーで、底抜けに明るく、風刺の効いたオペレッタだ。その序曲が、カンカン踊りに使われる例の音楽。

●モルダウ——スメタナ曲

四万十川がボヘミア(チェコスロヴァキア)の大河モルダウに似ているかどうかはわからないが、ウィスキーはどちらの河畔で飲んでもおいしいだろうと思わせるサントリー・オールドのCM。この曲は、チェコの国民的音楽というべき、スメタナの「わが祖国」の中に入っている交響詩。全6曲のうちの第2曲だ。モルダウの堂々とした流れと、そのまわりに広がる美しいボヘミアの風景が、曲の中に描かれている。

●美しく青きドナウ——ヨハン・シュトラウス2世曲

東京海上の保険にも、宇宙(映画「2001年宇宙の旅」にも使われていた)にも不思議と合ってしまうのが、ワルツ王ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」だ。はじめ男声合唱の曲として書き、それを管弦楽用に直している。ウィーンの近くを流れるドナウ川は、青く美しいとは言いが、この曲で永遠の青さを得た。ウィーンという街のテーマ曲とでも呼ぶべき音楽で、毎年元旦に行なわれるウィーン・フィルの「ニューイヤー・コンサート」では、必ず演奏されることになっている。踊ることもできるけれど、コンサート用ワ



ルツの代表作だ。

●交響曲第5番——ベートーヴェン曲

ベートーヴェンの交響曲の中で「運命」はあまりにも有名。そしてこれは、やはり極限的な交響曲だ。断片がどんどん積み上げられ、あれよあれよという間に、巨大な交響曲になってゆく。冒頭は例の「タタタター」という、どうということのない主題だが、このモチーフをバネとして燃え上がっていく。

●交響曲第1番——ベートーヴェン曲

指揮者の合図で演奏を始めるオーケストラ。だが指揮者は言う。「『第5』じゃないよ、『第1』だよ。」というわけで、第一家庭電器はもちろん第1交響曲だ。その第1楽章。このCMは10数年前の「名作」だけど、ベートーヴェンの交響曲が復活しているので、第1交響曲のCMも今度はフルオーケストラでリメイクされ復活。6月からオン・エアされる。29歳のベートーヴェンが書いた初めてのこの交響曲、もうはっきりと個性的だし、力いっぱい良さがある。



●第一家電：ベートーヴェン交響曲第5番「運命」第1楽章、交響曲第1番第1楽章

●各収録曲の、TVCM中で使用されている部分は以下の通りです。

SIDE 1 1.開始後約49秒より 2.開始後約30秒より 3.冒頭部分 4.冒頭部分

SIDE 2 1.冒頭部分 2.開始後約1分44秒より 3.開始後約30秒より 4.開始後約18秒より

SIDE 3 1.開始後約3分20秒より 2.開始後約11秒より 3.開始後約7秒より 4.冒頭部分

SIDE 4 1.冒頭部分より 2.開始後約5分より



●サントリー：ローヤル、「大地の歌」より第3楽章「青春について」

CMフォト協力：

日産自動車株式会社 三菱自動車株式会社 マツダ株式会社 いすゞ自動車株式会社 サントリー株式会社 株式会社文明堂 東京海上火災保険株式会社
株式会社博報堂 第一企画株式会社 株式会社電通 株式会社マッキンゼー エリクソン 博報堂 協同広告株式会社 株式会社CMランド 株式会社玄光社



エアロビクスと生け花を教える、好奇心旺盛で、年齢は気にもとめず、じっとしているのがきらいな、活動的なミス。(家に帰れば小6男子の母)

演奏者とスタッフの心がひとつに結晶した宝石

レコード録音体験記 ● 大橋佳子

3月18日、午前11時前、近畿大学ホール着。このホールは、昨秋完成したばかりで、外観はレンガ作り、中は、木の色が暖か味を添える。完成記念の、こけら落としの演奏会を大フィルがやったという縁と、録音に丁度よい大きさという事で選ばれたようだ。録音スタッフの方々は、私達が着く大分前から、準備に余念がなく、舞台には、長短のマイクが立ち並ぶ。長いものは、4m程もある。それもそうだ。何しろ、



100人からのオーケストラの音を、最良の状態で録音しようというのだから。それにしても、昨日の雨がうそのよう

に上がったのはいいが、曇天で膚寒く、おまけに、録音の為、エアコンが使えず、楽団の方は、指や管楽器が暖まるまで、時間がかかるだろうと思う。



12時、リハーサル開始。いよいよ始まったとワクワクして来る。何回かの練習のあと、テスト録音。その再生音を、指揮者とコンサートマスターが聞いて、マイクのセッティングが直され、最良の状態で音を拾う為の努力が続けられる。ブース中のディレクターは、総譜を見ながら、細かくチェック。時々、マイクで、舞台の指揮者に指示がとぶ。又、リハーサル。何回かのやりとりのあと、本番。これを、take 1という。より良いものを求めて、数字を重ねながら録音していく。録音開始第1曲は、スタッフとオケのウォームアップを兼ねて、

短い曲が選ばれたようだが、それでも30分もかかる。

2曲目。ヘンデルの「クセルクス」よりラルゴ。ソプラノと管楽器が入る。2回通し練習のあと、take 1。管が入った為、又、マイク

の長さの調節がなされ、静けさの中に、緊張感がたがよう。ピアノニッシモから入るソプラノが、



い感じ。

—お疲れ様でした。寒くなかったですか。

井岡—録音は、初めての経験なので、もう緊張して、そんな感じませんでした。

—歌手の方は、朝、声が出にくいとか聞きますが、ウォームアップに、どの位時間がかかりますか。

井岡—最低でも1時間以上。理想を言えば、昼から発声練習を1時間位して、昼食をゆっくりとって、練習して、夜本番というのが最高なんです。

—空調についてはどうですか。

井岡—ない方がいいです。空気が乾燥しますから。できれば、



暖かくて、適当な湿気があればと、ぜいたくな事言っていますが。

話している声は低く、ソプラノ歌手とはわからない

程。親しみやすい、感じのいい人で、つついこちらも乗ってしまっ、インタビューじゃなく、ずっと前からのお友達と、気楽なおしゃべりをしたという感じ。

休憩のあと、3曲目。「花のワルツ」きれいな曲。オケの音をじかに聞きながら、心はスイング。スタッフもオケも、いよいよ乗ってきた感じ。いいぞ、いいぞ。



だんだんクレッシェンドしていき、天から降って来るような声に聞きほれる。音の終わったあとの余韻がとてもいい。丁度よい残響で、やわらか

テノールの岩城さんに、インタビュー。体格がいいので、お聞きしたら、高校時代はラグビー部だったとか。それで、あのボリュームのある声が出るのかと納得。

—のどの為に、何か気をつけている事ありますか。岩城—ことさらは何も。酒はやりませんが、タバコは吸いません。毎朝、



黒酢を飲むようになってから、風邪をひかなくなりました。

ソプラノの井岡さんとは、大阪音大からの同期生。現在、お二人共、関西歌劇団で、活躍中。すっかりお二人が気に入った私は、絶対、オペラを見に行きますからと、再会を約して別れました。さわやかなお二人。がんばって。

それにしても寒い。休憩中は、管楽器のピッチが下がるといけないので、鳴らしたり、上着の中に入れて暖めたり、大へん。7~8分の長い曲の場合、何度も何度も、初めからとり直したと、寒いせいもあって、楽団の方、イライラして来るんじゃないかと思う。

4時から、ベートーヴェンの2曲。迫力ある音、さすが！録音関係者以外はいないこの広いホールで、何だか自分だけが、オケの音を独占しているような、ぜいたくな気分。

5時前、終了。寒い中、皆がんばったもの。お疲れ様。録音室内にも、ホッとした安堵感がたがよう。もう一日、明日もがんばりましょう。



二日目。昨日より少し暖か。おだやかな気候。開始前の緊張の中、時間をさいてもらって、コンマスの岡田さんに話を聞く。実質的に、オケを代表する立場の人。指揮者と楽団のパイプ役として、演奏面で気づいた点などの指示もされ、精神的にも大へんな仕事。

午前11時、開始。ガーシュウインの「ラブソディー・イン・ブ



石のよう



ルー」。指揮者とピアノの小原さんが、要所要所の出だしを、何度もチェック。管からの要望や、ディレクターからの指示等有り、何度も入念に、リハーサルが続けられる。take 2、OK！オケの休憩の間、ソロの部分のみ収録。広いホールに、ピアノの音だけが響く。終了後のインタビュー。

——お疲れ様でした。このホールはいかがでしたか。

小原—観客がいない為か、ちょっと響きすぎるように思います。残響があるので、余韻が消えてから、次の音を出すと、少し間があいてしまうように思います。

手を見せていただいたら、そんなに大きくはないが、指が太く、しっかりした手。それであの迫力ある音が出るのかと納得。なかなかの好青年。御活躍を祈ります。

それにしても、100人からの個性集団をまとめる指揮者は、大へんだらうと思う。録音の場合は特に、指揮者の人格が、大きくものを言うのではと思われ、インタビューに臨む。



——コンサートと違って、録音の場合は、大へんでしょう。手塚—スタッフとオケの緩衝壁にならないといけないですからね。

——大フィルとの付き合いは長いんですか。

手塚—4年前まで、11年間、指揮者でした。

あー、それで、この仕事に選ばれた訳だ。オケをよく知っていないと、又、楽団員から信頼されていないと、この長丁場の仕事はできない。手塚さんによれば、指揮者には、二つのタイプがあって、一つは、ほおっておいたらまとまりのつかない個性集団の、統率者であるというのと、二つ



目は、その個性のいい所を、最大限に引き出そうとする立場と。「私は、二つ目がいいと思います。」と言うと、「ぼくもそう思ってやっています。」との事。出ている、出ている。その暖か味のある気さくな人間性が、そのままリハーサル中にも出ている。冗談の言える、ほんとに気さくな、でも、いい音楽を作ろうという情熱を、スリムな体にひめた、とても素敵な方。

ここで、オーケストラという一つの巨大楽器を裏から支える人々を、紹介します。

組合委員長…「メンバーの生活水準の向上が組合の基本的考えですが、それがひいては、観客に、いい音楽を提供できる事になるんだと思います。近頃、コマーシャルに、クラシック音楽が沢山使われるようになり、企業が目をつけてくれたのは、当然の事だと思います。というのは、100人からの人が集まって、一つの音楽を作り上げるという事は、豪華だし、ぜいたくな事だから。」と、自らもヴァイオリニストで、やさしそうな藤井さん。熱っぽく語ってくれました。

事務局長…「基本的には、オケをよくする事が仕事です。具体的には、企画から経済面、団体交渉などです。」と、昨年10月までは、コントラバストップだった宮沢さん。オケの内部事情をよく御存知なので、メンバーの立場に立った企画をと、精力的に動かれています。

ステージマネージャー…演奏が始まるまでの舞台上での一切の仕事。楽器から譜面台の手配等、大へんな仕事。このように、陰で、いろんな人に支えられて、いい演奏が出来上がるんだと実感！

録音サイドでは、やさしそうなミキサーの池田さん。時々、ディレクターからの指示でマイクのボリュームレ



バーの操作をしている。

ディレクターの里見さん。「大フィルさんは、テキパキしていて、さすがプロ。順調に進んでいます。」との事。忙しい合間をぬっての、つかの間のインタビュー。緊張が続く中、申し訳ないみたい。

今日は、ポピュラーな曲が多く、特にワルツなど、ディレクターからも、「いいですねー。」との声が出る程の出来ばえ。私も思わず踊り出しそう。順調に進んで、午後2時、無事終了。ほんとに、お疲れ様！

あー楽しかった。二日間の感想です。細切れの休憩中の、団員の方々とおしゃべり。スタッフにうながされて、やっと時間がオーバーしている事に気がつく程、乗ってしまったインタビュー。皆々、やさしく、おもしろく、いい人達に囲まれて、ほんとに楽しく仕事が出来ました。今まで知らなかったオケの裏側や、録音状況等、非常に興味深く、貴重な経験をさせていただいたスタッフの方々に、感謝いたします。

このレコードを手になれます皆様、これは、演奏者、スタッフの心が一つになって出来上がった、磨きぬかれた宝石にも匹敵するものです。どうぞ、よくかみしめて、じっくりお聞きいただきたく思います。いい音楽は、皆の心の和から……。

Vive 大フィル！ Vive スタッフ！
Vive 人間！ Merci beaucoup！



その場の雰囲気、状況、気配が伝えられれば最高の録音です。

オーケストラ録音とワンポイント志向 ● 池田 彰

クラシック音楽と言えば、西洋音楽を示すのだが、この音楽も突き詰めれば民族音楽である。確かに音楽的、芸術的に確立されたものであるが、その音楽の成立を考えるとある地域であることが解る。それは宮殿であり、教会であり、劇場であった。又は放浪芸であった。作曲者はその音楽の演奏される場の効果を最大限に利用することを考慮したであろう。音楽が発展するには、その場があってこそである。何故このように言及するかと言えば、私はクラシック音楽と同時に民俗芸能を平行して録音しているからで、その録音発想は同じだと言える。音楽の奏される場所と芸能の行われる場所、その場の雰囲気、状況、気配が伝われば最高の録音と言える。それにはワンポイントマイクによる録音が至高であると思う。しかし実際は補助マイクも使用しなければならない時もあるが。

クラシック音楽に色々なファクターがあって、人それぞれの聞き方、見方をする。レコードになった姿には、又別な聞き方があることも否定できない。けれど忘れてはいけないこ



AKG C-414



ノイマン SM-69



とは最初に音楽が演奏された場であり、何回となく演奏され人々から良いホールと評価された伝統的な場で、オーケストラを聞くことから始まるのである。これは録音側の問題であり、レコードの聴者に転化する問題ではないのだが、少なくとも日本において海外の素晴らしいオーケストラが演奏する良いホールがあったならばと思うからである。最近の新しい音楽専用ホールでも、ヨーロッパの伝統を伝える音色と響きを持つものが残念な



がらない。

それでは良いホールとは具体的に言い表わせないものだが……。自身の耳が良くなった、能力が倍增したように聞える。例えば弦楽器の個々の音色の差、艶やかで刺激的でなく広がってゆく。けれど残響が多いのではなく、それぞれの区別ができる。低弦の響きは豊かで濁りが無い。木管の細やかな動きと輪郭、金管の華やかな艶と息吹。全体として融合していても混濁がない明るい響き。会場のどの位置にいても同じように聞える……。これらの理想的な事柄は現在の建築技術をもっても解決されていない。伝統とは何だろうと思う。

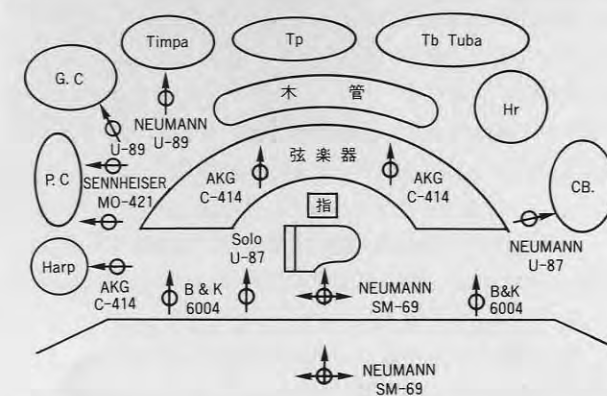
ワンポイント録音の実例

今回のように2チャンネル録音では後処理ができないので、不満の残るぬよう充分にセッティング時間を取った。入念なマイクチェックと機器の調整の為である。さて本番ではワンポイントマイク（ノイマン：SM-69）の位置決定に充分な時間をかけるのは当然である。しかしスケジュールの関係で必要な時間がとれない場合は、ミキサー、ディレクター、オーケストラの駆引きである。それも初録音のホールであれば尚更である。勿論それ以前にステージの広さ、反響板の位置、各

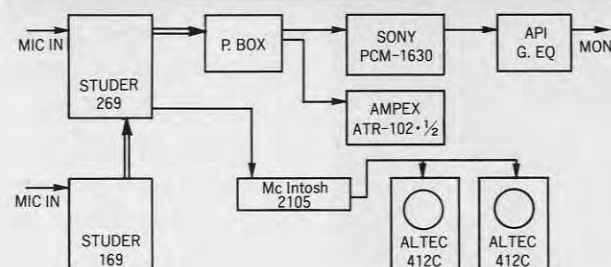


楽器の位置と間隔等、下見と打合せをしておかなければならない。録音曲順の決定は能率という意味でオーケストラにもミキサーにも重要なことである。今回は1曲目は「ピーターと狼」で弦楽器のみの編成であった。ここで各楽器の音色とバランス、響きを決定する。単純な編成であれば短時間で終了できる。2曲目「ラルゴ」遅いテンポと弱音での弦管のバランスを歌の響きを決める。3曲目「花のワルツ」オーケストラ全体の楽器のバランスとダイナミックレンジを。4曲目「ボレロ」パーカッションの音色とバランス等、その曲の特徴をつかまえて、聞くポイントを決めて調整してゆくと能率的である。しかしながら、その曲にそのマイクポジションが合っていないと曲目、編成が変れば変るのが必然であり、今回の録音はその意味でミキサーに大きな負担がかかり、体力と気力のスポーツの世界のようであった。

マイク・セッティング



録音ダイアグラム



終戦翌年、池にコイがわくような団結から40年……

大阪フィルかけ足ヒストリー ● 松本勝男

大阪フィルの歴史は、朝比奈隆が着の身着のまま、満洲から神戸に引き揚げてきた時（1946年秋）に始まる。年末、NHK・大阪の第1スタジオ（現在もラジオ番組の制作に大活躍中）に、復員したり引き揚げてきた音楽関係者が7、80人も集って、オーケストラは自然発生的に、池にコイがわくような形で誕生、翌年1月25日に、占領米軍の許可を得て、ドヴォルザーク「新世界」を演奏、それはJOBKの電波に乗って、焼跡の大阪の街々に流れた。そのドヴォルザークは、むやみとテンポが速かったという記憶だけが、今も、私には残っている。このオーケストラの放送は月に1回だった。春を待たずに、放送スタジオから街に出て、ステージでコンサートをやろうという声、メンバーの中から起った。それが結実したのが、昭和22年（1947年）4月26日に大阪朝日会館で開かれた関西交響楽団（大阪フィルの旧称）第1回定期演奏会である。朝日会館はすでに取りこわされて、いまは高速道路になっているが、戦前から戦後にかけて半世紀に近く、大阪の音楽の殿堂として、クラシック・ファンにしたまわれてきた。

朝比奈隆&ヒズ・オーケストラの前途には、苦難の道が待ちかまえていた。当時住友銀行の頭取だった鈴木剛（故人）が資金を調達、商工会議所会頭だった杉道助が会議所（現在のサントリービルの西側附近）の4階を練習所に提供するなど、スタートは切ったものの、楽団の収入は映画の「ゲキパン」出演で受け取るギャラだけ。とても経営といえるものではなかったようである。「東映、大映、松竹と契約して、夜中に徹夜で、近藤勇も忠臣蔵も鞍馬天狗も何でも手当たりしだいやったネ」と、朝比奈は回想する。

徹夜のアルバイトが明けると定期演奏会である。血相変えてカリカリ、ギコギコ弾きまくるベートーヴェンやワーグナーを、かけ出しながら、いっぱしの評論家を気取った私が、身も皮もない骨ばかりの演奏と、繰り返してきこおろしたのは昭和30年（1955年）前後である。

行きがかりで（というのも、かなり無責任な話のように聞こえるかもしれないが——）昭和31年に生まれたばかりの京都市交響楽

団に、私は、意識的に肩入れをせずにはいられなくなった。コブレンツ生まれのカール・チェリウス（故人）が初代の常任指揮者に招かれて、こつこつ、こつこつ、まるで細工物をつくるように、彼のオーケストラを育て上げようと、はげみにはげんだ。長い間練習したモーツァルトやハイドンを、きちんとやる京響の演奏は、ベートーヴェンやワーグナーを大雑把にでっち上げる関西交響楽団とは、まったく対照的だった。“それにひきかえて関西交響楽団は……。”という筆法で、朝比奈&ヒズ・オーケストラとしての関響に、何度も噛みついた。

京都市響は、経営に苦しむ関響から、多くの貴重な教訓をくみ取って、市立のオーケストラとして発足した。当時の市長の英断と、初代の事務長の知恵を熬り合わせて、後に、京響の演奏活動の本拠となる京都府会館建設に至るまでの路線を開いた昭和30年代前半こそ、京都の楽壇の黄金時代だったといつてよいだろう。

朝比奈隆は、昭和35年、音楽的にも経営的にも行きづまった関響を、鈴木剛の助言を入れて、解散させた。清水組に建ててもらったばかりの、ぜいたくな練習場（現在は大阪音楽大学の講堂）を、音楽大学に売りはらって退職金にあて、退職者を振り分けて、映画のためのオーケストラと、コンサート活動に専念する大阪フィルハーモニーと、ふたつのオーケストラを創設するという荒療治をやったのけた手腕には、ただもう感心するばかり。生まれ変わった大阪フィルの演奏力は、急速に伸展した。遠山信二（故人）、外山雄三、秋山和慶……を専属指揮者として、つぎつぎに迎えるというスタッフの強化策が、効果を発揮し始める。昭和40年から45年にかけての急成長は、ちょうど日本の経済の急激な発展に平行した現象のように、目には見える。「大阪の秋・国際現代音楽祭」が昭和38年に始まり、55年まで続く間に、大阪フィルは大規模な現代作品を消化して、楽員の感性は飛躍的に広がった。この間の演奏曲目については、グローヴ音楽辞典（最新版）に詳細な紹介がある。

学習研究社版「ベートーヴェン交響曲全集」のレコーディング（昭和48年）を皮切りに、50年代に入って、大阪フィルのレコード制作

には、はずみがついた。ベートーヴェンの交響曲全集に限ってみても、昭和53年のビクター、同60年に再びビクターと、3回収録している。51年のブルックナー交響曲全集、54年のブラームス交響曲全集のほかにマーラー、チャイコフスキー、リムスキー・コルサコフの作品も、朝比奈=大阪フィルはレコーディングし（主としてキングレコード）、商業ベースに乗るオーケストラとしての地位を確保した。レコード発売枚数の最も多いオーケストラ、それは日本では朝比奈隆指揮大阪フィルである。苦難の道の果てに、ここに到達した。「たどりついたと思ったら、別の新目標がぼくを手で招くんだよ。やりきれないネ、このまま、80歳になるのかネ」と朝比奈はいう。大阪フィルはことし40歳。これから成熟期に向かうことになる。朝比奈隆には、世界の長老指揮者としての使命があるはずで、こんな所で息切れしてもらっては困るのだ。

大阪フィルが創設50周年を迎える1997年までに実現してもらいたい目標がひとつある。海外公演である。75年のヨーロッパ・ツアー、80年の北米演奏旅行、86年のヨーロッパ再公演など、海外公演は3度体験しているが、必ずしも商業ベースに乗った“興行”ではなかった。旅費を一般のファンから募るなど、かなり無理を重ねての強行であった。第4回の海外公演では、実力もそなわり、海外での評価も高まり、海外のマネージメントに招かれて——という形にならないものだろうか。同時に地元へのサービスも力を入れてほしい。ポピュラーなオーケストラの小品を、気楽に味わえるようなプログラムを、時には、提供してほしい。そういうプランには打ってつけの指揮者・手塚幸紀を、大阪フィルは、約4年ばかり前に、京都市響へ送り出してしまった。いまは、10年あまりの関西生活に終止符を打ち、東京に活動の本拠を移した手塚だけれど、ドビュッシーやラヴェルの作品で発揮した手塚の感性のきらめきが、なつかしい。山田一雄門下の逸材だけあって、これからは独自の進路を開き、着実に歩みにつけることだろう。どこか不器用な大阪フィルから、しゃれた表情を抽出できるのは、手塚の棒さばきだけである。



DAMハイクオリティレコードについて

音楽パッケージもこのところDATをはじめ、CD-V、CD-I等、次々に新商品の開発が具現化し、今回ますます多品種化の傾向を呈し、音楽プログラムに対するアプローチの仕方も更に多様化し、より個性化すると思います。

今やアナログディスクは、完全にコンパクトディスクにその主流の座を奪われ、100年以上続いたアナログディスクと短期間のうちに世代交替したコンパクトディスクの優位性は、まさしく脅威的なものを感じます。しかし、話題に乏しいアナログディスクとはいえ、アナログならではの魅力と常に音の限界にチャレンジしても余りある可能性を秘めているディスクレコードは、尚、一層興味と期待の大きいものがあります。DAMレコードは、一作毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の最新技術の導入を図り、常に限界とその可能性を求めて来た経過がありますが、前回のガラス原盤を素材としたラッカーマスターを初めて採用した超重量200gレコードは、真に現状のアナログディスクの市場性とその背景を考えれば、1つの完成領域に到達したディスクであったと確信しております。今回のDAMレコードの特長は、その最高水準と確信する超重量200gレコードで採用した製造ノウハウと、更にコンパクトディスクやビデオディスクの周辺技術を導入することはもちろんのこと、特に新しい測定評価技術を採用することで従来とは別な観点での理論解析により音質改善の対策を進めて来た点にあります。一部の工程では、今だに生産性を度外視した相当なリスクを覚悟で、手造り的な製造方法をとったり、まさしく音質重点主義で進めたアナログディスクの総力を上げチャレンジした、私共の制作ポリシーを、きっと皆様は理解して頂けるものと思います。

それでは今回の特徴を紹介いたします。

ディスクレコードの平面、平滑性は、音質へ影響する重要なファクターでもあり、総括的な意味で音溝波形の成形精度に集約されますが、今回の商品質化のポイントは、この点にあります。

アナログディスクの徹底した性能分析より、ビデオディスク成形の周辺技術を応用したプレス金型を新しく開発することからスタートした、前回の超重量200gレコードの製造技術とその設備を利用し、今回の160g重量レコード用プレス金型の精度や鏡面性を対処することで、ディスク面のストレス(歪)を最小限に押え込み、忠実な音溝波形を成形しています。更に今回の特徴は、メッキ工程にあり、これはコンパクトディスクの製造ノウハウと設備を採用して、クリーンルーム処理を行い、従来に無い超精密な電解メッキにより、ラッカー音盤の音溝を忠実に転写し、雑音の少ないS/N比の良い原盤を作成しました。

今回は特にディスクの面精度を改善する為に、メッキ工程に於いて、スタンパー作成は特に高密度な電解メッキ方法と

研磨仕上げとによって、優れた平滑性が得られています。

これらの改善により、真円性の大幅な向上とワウフラッターの影響を極力減少させることで、特に低周波数帯域による変調が少なく、全体の分解能が改善され、楽器の音程がより安定感のある響きと、強奏部での解像力も一枚ペールを剥したような鮮明さは、アナログディスクの魅力ともいえます。又、音像の実存感はまさしくマスターテープのもつオリジナルサウンドの世界だと思えます。

御存知のように、ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は、左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特にDAMレコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝幅の変化は、 $20\mu\sim 300\mu$ (L-R)程に達する位、高精度化しております。

この複雑な溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウやテクニックがいろいろ論じられて来た経過があります。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によってその振動がカートリッジヘリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコード重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ、共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

ターンテーブルや、マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状も又少なからず、音質変化の要因と考えられます。特に、再生条件を考慮し、今までのフラットレコード以上に精度の高いフラットプロフィールを採用致しました。このフラットネスの良さは、ターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、再生時に起り得るレコードの共振がマットを介して逆にレコードへ、フィードバックされるこのリアクションを緩和させる効果があります。

この様な高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定効果の高い安定剤の組合わせにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまって極めて安定度の高い、S/N比の良いレコードを提供することが出来ました。

以上のように今回のDAMレコードは、現状の最高水準の製盤プロセスを経て制作されております。

デジタルサウンドとの出合いも最近は多くなって来ていると思いますが、是非、このアナログディスクのもつサウンドの魅力を充分に感じ取って頂ければ幸いに思います。

(30センチ45回転レコードの 取扱いについて)

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃～20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

再生にあたって、カートリッジやアームによっては、トレースが難しい場合もあります。特に冬に向って、室温は20℃前後、針圧は、指定の範囲で重い方にセットしてください。又、曲によっては、ハイレベル・カッティングのため、一部ゴーストがありますが、御了承ください。

カッティング・データ

Cutting Date: 23 & 28 April, 1987
Toshiba-EMI Akasaka
Tape Recorder: STUDER A 80 (1/2インチ 76 cm/Sec. 2 ch)
Drive Amplifier: Neumann SAL-74B
Cutting Lathe: Neumann VMS-80
Diamond Cutting Stylus
Cutting Head: Neumann SX-74
Non Limiter
Non Equalizer

スタッフ

総合プロデューサー	： 小山正敏、八田 甫
プロデューサー／ディレクター	： 里見清司
バランス・エンジニア	： 池田 彰
カッティング・エンジニア	： 竹内昭五
ジャケット	： 榊グラバー企画
フォトグラファー	： 伊藤 隆
制作協力	： 近畿大学
録音年月日	： 1987年 3月18、19日
録音場所	： 近畿大学11月ホール
企画・制作	： DAM推進委員会 DAMPS
製造	： 東芝EMI株式会社